

叡尊教団の豊後・豊前両国における展開 A Study of the Development of Eizon's Order in Bungo and Buzen Provinces

松尾 剛次
MATSUO, Kenji

キーワード：大興善寺, 大楽寺, 金剛宝戒寺

key words : Daikouzenj, Dairakuji, Kongouhoukaiji

はじめに

奈良西大寺叡尊をいわば開祖とする叡尊教団は日本全国に末寺を展開した。その豊後・豊前両国における展開については、八尋和泉氏の美術遺品に注目した優れた研究がある*¹。八尋氏の研究は、たんなる美術遺品の研究のみならず叡尊教団の九州における展開を美術遺品と関連付けて論じている。氏の研究によって、多くの叡尊教団による美術作品に光が当てられた。氏の研究は優れているが間違いもある。そこで、氏の研究に学びつつも、とりわけ教団側の視点から叡尊教団の豊後・豊前両国における展開をみよう。

第1章 豊後国

叡尊教団の展開を考えるうえで、明德2(1391)年に書き改められた「西大寺末寺帳」(以後、「明德末寺帳」と略す)は大いに役に立つ。

史料(1)*²

豊後国	
<small>〔府中〕</small> 金剛宝戒寺	<small>日田</small> 永興寺「東室」
<small>佐伯庄</small> 最勝寺「一室」	潮音寺

「明德末寺帳」は、奈良西大寺の直末寺(西大寺の直轄寺院)を書き上げたものだが、それによれば、豊後国には府中金剛宝戒寺、日田永興寺、佐伯庄最勝寺、潮音寺の4箇寺が所在したことがわかる。また、「明德末寺帳」の記載の順序は寺格を表している*³。それゆえ、金剛宝戒寺が豊後を代表する寺格を誇る西大寺直末寺であったことになる。

史料(2)*⁴

豊後国	
<small>府中</small> 金剛宝戒寺	永興寺
<small>佐伯庄</small> 最勝寺	潮音寺
神宮寺	

ところで、史料(2)は、1453年から1457年にかけて作成された「西大寺末寺帳」*⁵の豊後国の分である。それによれば、豊後国の西大寺直末寺に神宮寺も加わっている。おそらく、神宮寺も15世紀半ばには西大寺直末寺の1つであったと考えられる。また、後述するように、豊後国分寺も西大寺末寺であったと考えられる。以下、6つの寺院についてみよう。

第1節 金剛宝戒寺

まず、寺格第1位の金剛宝戒寺からみよう。金剛宝戒寺は、清龍山金剛宝戒寺といい、現在は、高野山真言宗の寺院であるが、もとは叡尊教団の真言律宗寺院である。寛永10(1633)年3月7日付「西大寺末寺帳」*⁶や享保3(1718)年8月以後作成の「西大寺末寺帳」*⁷にも豊後国分として金剛宝戒寺は見え、江戸時代においても西大寺直末寺であった。明治32(1899)年5月6日附で西大寺末から高野山末に代わった*⁸。

永享8(1436)年の「西大寺坊々寄宿末寺帳」という光明真言会の際に西大寺内のどこに宿泊するかを記したのものにも、金剛宝戒寺は「西室」分に記載されている*⁹。すなわち、西室に宿泊していた。永享8年においても、金剛宝戒寺僧は奈良西大寺まで毎年参っていたのである。この点は大いに注目される。

ところで、金剛宝戒寺には、南都仏師康俊・康盛作の文保2(1318)年銘を有し重要文化財の大日如来像や延慶3(1310)年銘を有する湛幸制作の清涼寺式釈迦像を初め律寺時代の遺品が残り、その繁栄ぶりが偲ばれる*¹⁰。とりわけ大日如来像は像高3メートルを超える優品である。そのこともあって、従来は美術史的な研究が中心*¹¹で、寺院史的な研究は手薄といわざるをえない。

金剛宝戒寺は、現在の大分県大分市上野丘に所在する。神亀4(727)年、聖武天皇の勅願、行基が大分郡荏隈郷五丁津留に開いたという。その地は、大分川の洪水に見まわれることが多く、大友氏の第6代貞宗は、徳治年中に大友邸の西側に移して再興し、奈良海竜王寺から幸尊を住職に招いたという。八尋氏は文保2年銘のある重要文化財の大日如

来像を幸尊による中興活動による建立とされる*¹²。

そうした寺の略伝でまず注目されるのは、金剛宝戒寺が行基開創の伝承を有している点である。叡尊らは強烈な行基信仰を有し、行基の生家を律寺(家原寺)とし、そこが叡尊教団の「戒律復興活動」の出発点であった。また、行基入滅地である菅原寺を復興するなど行基ゆかりの寺院も叡尊教団の復興活動のターゲットであった。それゆえ、金剛宝戒寺を復興しようとしたのも、行基ゆかりの寺院だったからであろう。

いま一つは、金剛宝戒寺の当初の地が洪水に見舞われる川辺にあった点である。叡尊教団の寺院は海・川交通を把握し、港・橋の修築・管理のために海・川の近くに建つことが多い*¹³が、金剛宝戒寺も当初はそうした役割を期待されていたのかもしれない。

さて、金剛宝戒寺の復興をスタートさせた幸尊については比較的多くの史料が残存している。

史料(3)*¹⁴

長禅尊律師伝

律師諱幸尊、字長禅、不知何許人也、少出家有解行、從興正菩薩、以申北面、建長八年受息慈戒、康元二年進具足戒、諸宗典籍備究文義、而以律密二教知名、文永四年受具灌頂、嗣後住海龍王寺為第四世、大啓律席、黑白仰止、門人寂慧等若干人、



史料(3)は『律苑僧宝伝』巻13の長禪房幸尊伝*15である。それによれば、幸尊は房名(字)を長禪房といい、建長8(1256)年に沙弥戒を受け、康元2(1257)年に具足戒を受け、諸宗を学び、戒律と真言を極めたという。文永4(1267)年には伝法灌頂を受けた。その後、海龍王寺に入り、第4代海龍王寺長老となったことなどを伝えている。この『律苑僧宝伝』の略伝は後述するように、他の史料からも傍証される。

弘安3(1280)年に書かれた叡尊の直弟子名簿といえる「授菩薩戒弟子交名」によれば、109番目に「大和国人 幸尊 長禪房」とある*16。それゆえ、幸尊は、叡尊の109番目の直弟子で、房名を長禪といい、大和国の出身であったことがわかる。

また、叡尊の伝記である「西大勅諭興正菩薩行実年譜」*17によれば、

史料(4)*18

(康元元年)

秋八月。授沙彌戒于長禪尊公(長禪房幸尊)等。又講梵于攝之四天王寺。聽徒二千餘指。皆一時傑偉之子也。講既卷回西大寺。

とあって、康元元(1256)年8月には沙弥戒を叡尊より受けている。

また、「西大勅諭興正菩薩行実年譜」の正嘉元(1257)年条によれば、

史料(5)*19

正嘉元年丁巳 改元 月 日(三月十四日)
菩薩五十七歳、春正月、授具足戒、於長禪幸尊玄基等一十餘人、

とあり、正嘉元(1257)年の正月には、叡尊から具足戒を受けている。

また、「西大勅諭興正菩薩行実年譜」によれば、

史料(6)*20

(文永)

三年丙寅
菩薩六十六歳、(中略)十月廿四日、重結界西大寺、菩薩秉羯磨、答法總持律師、唱相幸尊律師也、(後略)

とあって、文永3(1266)年10月には、西大寺の重ねての結界に際して幸尊は唱相の役を勤めている。

さらに、「西大勅諭興正菩薩行実年譜」によれば、

史料(7)*21

文永四年丁卯

菩薩六十七歳、春三月、為長禪尊公等、執行伝法灌頂、

とあって、文永4(1267)年3月には、叡尊から伝法灌頂を受けている。

また、叡尊の自伝たる「金剛仏子叡尊感身学正記」*22(以後、「学正記」と略す)によれば、

史料(8)*23

文永十二年改元建治乙亥、七十五歳

(中略)

七月廿五日、率僧衆百余人、參平岡社頭、孝徳天皇聖武天皇二代有功驗、廿六日、大般若經転読講讚、発願結願、有法用、唄長音、散

花教遍、夕方、登社壇、誦心經千卷、呪一万遍、廿七日、中食以前、行理趣三昧調声生恵、讚有禪、中食以後、仁王会発願、平座結願、用蓋高座、法用、唄貞信、散生恵、夕方、參若宮、誦三十頌一卷、文殊呪百返、及于夜陰、八十一人授菩薩戒、廿八日、中食以前、奉転読講讚金剛般若經、作法如仁王会、唄道源、散華幸尊、

とあり、文永12(1275)年7月28日に叡尊が枚岡社(大阪府)で金剛般若經を転読した際に散華役を勤めている。すなわち、その頃までは西大寺所属の僧であった。

ところが、弘安3(1280)年の「西大寺西僧坊造営同心合力奉加帳」によれば、海龍王寺は西大寺西室建設のために15貫を寄付したが、その内の5貫文を長禪房幸尊が負担している*24。このように、弘安3(1280)年頃には海龍王寺所属であったことがわかる。

以後、海龍王寺僧として活動し、海龍王寺長老となったのであろう。弘安4(1281)年に蒙古軍退散祈禱を叡尊が石清水八幡宮で行った際には伴僧を勤めている*25。

史料(9)*26

(一七八五)
弘安八年乙酉三月廿一日、為正法寺尼衆十二人、於法華寺行本法、次於当山戒壇、西大叡(尊)学公羯磨、吾証玄公答法、西琳寺惣持公説相、海龍王寺幸尊引導、招提尋算公、又喜光性海、光台空恵、弘正宣海、西大禪恵、招提円証、西大隆恵堂達、尼十師者、法華真恵為和上、道明了祥為羯磨、法華照聖為答法、法華妙遍、同照心、同妙善、同宗円、同聞勝、同融然、同智玄、同智遍、其中玄為教授、智遍為堂達、吾山戒壇久不行受戒、証玄和上再興僧尼受戒、

従是僧尼受戒盛行之、

また、史料(9)によれば、弘安8(1285)年3月、唐招提寺戒壇で行なわれた正法尼寺の尼衆に対する授戒では叡尊をはじめ、西琳寺惣持・喜光寺性海・西大寺禪恵など、叡尊教団の僧たちの一人として、招提寺流の僧たちとともに、三師七証を勤めた*27。

とりわけ注目されるのは、正応3(1290)年に叡尊より寺事の付属を受けた大弟子6人の1人であった点である。

史料(10)*28

(正應三年八月)
廿四日。淨髮澡身。着新淨衣。次早六念等法不異平時(日)。齋罷跏趺入觀。時有紫雲。現于寺上。道俗見慌忙奔至。聞菩薩將示寂。始駭然稱異。合掌加額。唱南無思圓佛。未刻召嘗囑寺事之大弟子信空。源秀。幸尊。性瑜。阿一。總持等諸公。重懇囑累。更亦告白。

史料(10)は、「興正菩薩行実年譜」の正応3(1290)年8月24日条である。死を自覚した叡尊は、信空・源秀・幸尊・性瑜・阿一・總持の6人を枕元に召して後事を託したことを伝えている。幸尊は、叡尊から教団の将来を託された6人の内の一人であったのだ。すなわち、幸尊は、叡尊によって大いに重要視される人物であった。

ところが、徳治年間には、大友貞宗によって豊後国金剛宝戒寺に招かれた。八尋氏は、その年を『豊鐘善鳴録』などにより、徳治2(1307)年とされる*29。その可能性も高いが、その時期はもう少し限定されそうである。というのも、叡尊教団の物故者名簿といえる「光

明真言過去帳」*30には、

史料(1)*31

勤聖房 招提寺長老 ○覺一房 泉涌寺長老
道照房 覺菌寺 長禪房 海竜王寺

○本照房 當寺住

史料(1)のように、長禪房幸尊が、嘉元4(1306)年2月15日付で亡くなった招提寺長老勤聖房*32と徳治2(1307)年2月24日に亡くなった西大寺本照房性瑜*33との間に記載されている。

とすれば、長禪房幸尊は、1306年2月15日から1307年2月24日までに亡くなったと考えられる。それゆえ、幸尊が徳治2(1307)年に金剛宝戒寺に下ったとすれば、その年の正月から2月の間ということになり、金剛宝戒寺長老在任期間は極めて短かったことになる。だからこそ、「光明真言過去帳」に金剛宝戒寺僧ではなく海龍王寺僧として記載されたのであろう。もっとも、『豊鐘善鳴録』ほかで、幸尊が中興開山として大きく取り上げられているのは、幸尊が叡尊6大弟子の一人であったからであろう。それ故、文保2(1318)年の銘文をもつ大日如来像などの建立など、金剛宝戒寺の中興活動において実質的に重要な役割を果たしたのは先学の指摘されるような幸尊ではなく、幸尊の後を継いだ人物に託されたと考えられる。

幸尊の後を継いだ人物といえ、[光明真言過去帳]に金剛宝戒寺僧として最初に出てくる理一房であろう。

史料(2)*34

本性房 極楽寺長老

(中略)

蓮生房 西琳寺 理一房 金剛宝戒寺

(中略)

賢信房 飯岡寺 ○印教房 極楽寺長老

史料(2)のように、「光明真言過去帳」には、理一房は建武元(1334)年11月21日に亡くなった極楽寺長老本性房*35と暦応元(1338)年7月27日に亡くなった極楽寺長老印教房円海*36との間に記載されている。理一房は、その間に亡くなったのであろう。

ところで、弘安3(1280)年の「授菩薩戒弟子交名」に「西大寺現在形同沙弥」の一人として「誓忍 理一房 二十 越中国人」*37と出てくる人物がいる。すなわち、越中国出身の理一房誓忍で、弘安3年において20歳で、西大寺所属の形同沙弥であった。また、弘安3(1280)年の「西大寺西僧坊造営同心合力奉加帳」にも西大寺所属僧として1貫500文を寄付している*38。西大寺関係史料に、理一房なる人物は他に知られていないので、この理一房誓忍を後の金剛宝戒寺長老の若き日の姿と想定したい。この理一房誓忍が徳治2(1307)年に幸尊の後を継いだとすれば、47歳で金剛宝戒寺の長老となったことになる。この理一房誓忍こそ、仏師康俊らに依頼して、金剛宝戒寺に現在も残る大日如来像を建立した中心人物であろう。

というのも、平成7(1995)年の大日如来像「修理記録写真」の胎内銘調査報告には、「体部前面中段中央部銘文」に「文保二年戊午十二月九日金剛仏師興尊、興尊遺弟性智(忍力)」*39と見える。すなわち、文保2(1318)年には幸尊(音通で興尊は幸尊と同じ)が亡くなっていたのは明らかであろう。幸尊が建立を計



画したのであろうが、理一房誓忍こそが、幸尊の意思を継いで、大日如来像などの建立の実質的中心人物であったと考えられる。

金剛宝戒寺は江戸時代の18世紀においても西大寺直末寺であったので、理一房以後にも、金剛宝戒寺の住職名が史料(10)から(18)のように、「光明真言過去帳」には出てくる。

史料(13)*40

當寺第六長老沙門澄心（中略）

照観房 金剛宝戒寺 浄生房 弘正寺
（中略）

○當寺第七長老沙門信昭

理一房の次には、照観房が、貞和3（1347）9月5日に70歳で亡くなった*41西大寺第6代長老澄心と、文和1（1352）3月2日に86歳で死亡した*42西大寺第7代長老信昭との間に出てくる。照観房はその間に亡くなったのであろう。

史料(14)*43

當寺第十長老沙門清算

良教房 金剛宝戒寺 正信房 大興善寺
道圓房 西琳寺 重圓房● 興善寺

○當寺第十一長老沙門覺乘

照観房の次に良教房が記載されている。良教房は貞治1（1362）年11月14日に75歳で亡くなった*44西大寺第10代長老清算と、貞治

2（1363）年1月26日に91歳で亡くなった*45西大寺第11代長老覺乗との間に出てくる。それゆえ、良教房はその間に亡くなったのであろう。

史料(15)*46

當寺第十三長老沙門信尊

律乘房 金剛宝戒寺 賢俊房 大乘院
（中略）

○當寺第十四長老沙門堯基

廿一日（白紙ヲ貼ッテソノ上ニ）

良教房の次に律乘房がいる。律乘房は、貞治5（1366）年9月20日に70歳で亡くなった*47西大寺13代長老信尊と応安3（1370）年4月4日に75歳で亡くなった*48西大寺第14代長老堯基との間に記載されている。

史料(16)*49

當寺第十四長老沙門堯基

（中略）

照寂房 金剛宝戒寺

（中略）

○當寺第十五長老沙門興泉

律乘房の次に照寂房がいる。照寂房は応安3（1370）年4月4日に亡くなった*50西大寺第14代長老堯基と、康暦1（1379）年6月晦日に86歳で亡くなった*51西大寺第15代長老興泉との間に記されている。照寂房は、その間に亡くなったのであろう。

史料(17)*52

當寺第十五長老沙門興泉

（中略）

了性房 西福寺 尊覺房 金剛寶戒寺
(中略)

了淨房 正國寺 了義房● 長門國分寺
○當寺第十六長老沙門禪譽

史料(17)のように、照寂房の次には尊覺房が「光明真言過去帳」に見える。尊覺房は、康暦1(1379)年6月晦日に86歳で亡くなった西大寺第15代長老興泉*⁵³と、嘉慶2(1388)年5月5日に90歳で死去した西大寺第16代長老禪譽*⁵⁴との間に記載されている。尊覺房はその間に亡くなったのであろう。

史料(18)*⁵⁵

○當寺第十六長老沙門禪譽

(中略)

宗詮房 長光寺 淨泉房 常樂寺
教雲房 金剛寶戒寺 義明房 岡輪寺
乘如房● 靈山寺
當寺第十七長老沙門慈朝

尊覺房の次には史料(18)のように教雲房が「光明真言過去帳」に見える。教雲房は嘉慶2(1388)5月5日に90歳で死去した西大寺第16代長老禪譽*⁵⁶と、明德2(1391)年4月9日に73歳で亡くなった西大寺第17代長老慈朝*⁵⁷との間に記載されている。教雲房はその間に亡くなったのであろう。

史料(19)*⁵⁸

○當寺第十八長老沙門深泉

(中略)

良證房 金剛寶戒寺

(中略)

○當寺第十九長老沙門良耀

史料(19)のように、「光明真言過去帳」には教雲房の次に良證房が見える。良證房は、應永2(1395)年9月25日に死去した西大寺第18代長老深泉*⁵⁹と、応永11(1404)年2月25日に亡くなった西大寺第19代長老良耀*⁶⁰との間に記載されている。良證房は、その間に亡くなったのであろう。

史料(20)*⁶¹

恵明房 招提寺長老 祐覺房 般若寺
春琳房 當寺住 宗明房 國分寺
祐春房 淨名寺 慶運房 金剛寶戒寺
(中略)

○當寺第十八長老沙門元澄

史料(20)のように、「光明真言過去帳」には良證房の次に慶運房が見える。慶運房は、享徳3(1454)年12月10日に死去した招提寺長老恵明房任宗*⁶²と、長祿元(1457)年11月8日78歳で亡くなった西大寺第28代長老元澄*⁶³との間に記載されている。慶運房は、その間に亡くなったのであろう。

以上、15世紀半ばまで金剛宝戒寺長老の存在が知られる。しかし、それからしばらく「光明真言過去帳」から金剛宝戒寺僧の存在が消え、18世紀になって現れる。

史料(21)*⁶⁴

當寺第五十一長老沙門尊信

(中略)

真覺房 豊後國金剛宝戒寺

(中略)

當寺五十二長老沙門高尊(カ)

史料(21)のように、豊後金剛宝戒寺の真覺房

が、元禄4（1691）年6月27日に77歳で亡くなった*65西大寺第51代長老尊信と享保元（1716）年11月13日に73歳で亡くなった*66西大寺第52代長老高尊との間に記載されている。真覚房は、その間に亡くなったのであろう。

以上のように、金剛宝戒寺は享保元（1716）年においても西大寺末寺であったにもかかわらず、15世紀の後半から18世紀の真覚房まで「光明真言過去帳」に出てこないのはなぜである。とりわけ、文政13（1830）年には金剛宝戒寺36世によって「清瀧山金剛寶戒寺由来記（一）」が書かれており*67、永正13（1516）年・天正4（1576）年の火災を乗り越えて*68、その頃までは西大寺末寺として存続していただけに謎であるが、今後の課題としたい。

第2節 日田永興寺

日田永興寺は、現在の大分県日田市城町に所在する。花月川の河岸に立つ永興寺からは日田市街を一望できるが、花月川は筑後川の上流に当たり、永興寺もまた川を通じた交通の要衝に当たることに注意を喚起したい。永興寺は史料が少なく、異論はあるが、延久3（1071）年に郡司大蔵（日田）永季によって父永興の菩提を弔うために新羅僧智元を開山として建立された*69という。日田市内で最古の寺院で、現在は浄土宗である。11世紀の国宝十一面観音像、14世紀の四天王像など8体の仏像がある。とりわけ、後述するように四天王像4体は永興寺が律寺時代の遺品である*70。

先の「明德末寺帳」によれば永興寺は豊後国の西大寺末寺のうち2番目に記載されており、豊後国の西大寺直末寺の第2位に位置す

けられる。また、永興寺は、先述の永享8（1436）年の「西大寺坊々寄宿末寺帳」にも、「東室四」*71分として見える。毎年奈良西大寺で開催される光明真言会には「東室四」に宿泊することになっていたのだ。このように14世紀～15世紀においては西大寺末寺の律宗寺院であった。

そのことは、14～15世紀に、日田永興寺僧が史料②②～②③のように「光明真言過去帳」に出てくることから論証される。

史料②②*72

賢信房 飯岡寺 ○印教房 極楽寺長老
教性房 永興寺 宣戒房 福田寺
(中略)

○堯仙房 泉涌寺長老 明忍房 称名寺

まず、教性房が永興寺僧として最初に「光明真言過去帳」に出てくる。教性房は暦応元（1338）年7月27日に死去した*73極楽寺長老印教房円海と、建武5（1338）年11月16日に死去した*74金澤称名寺明忍房の間に記載されている。とすれば、教性房は1338年7月24日から11月16日の間に死去したと考えられる。このことから、永興寺は1338年以前には西大寺末寺の律寺であったことがわかる。

史料②③*75

○寂禅房 招提寺長老 念観房 神宮寺
(中略)
了性房 永興寺 堯真房 長藺寺
(中略)

本如房 称名寺 良仙房 丹波惣持寺

史料②③のように「光明真言過去帳」には、

教性房の次には了性房が出てくる。了性房は、
曆応4（1341）年6月15日に死去した唐招提
寺長老寂禅房*76と貞和2（1346）年11月30
日に死去した称名寺長老本如房*77との間に
記載されている。了性房は、その間に亡くなっ
たのであろう。

史料⑭*78

○當寺第六長老沙門澄心

道忍房 保延寺 如性房 永興寺
（中略）

○當寺第七長老沙門信昭

史料⑭のように「光明真言過去帳」には、
了性房の次には如性房が出てくる。如性房は
貞和3（1347）9月5日に70歳で亡くなっ
た西大寺第6代長老澄心*79と、文和1
（1352）年3月2日に86歳で亡くなった西大
寺第7代長老信昭*80との間に記載されてい
る。如性房は、その間に亡くなったのであろ
う。

史料⑮*81

當寺第十五長老沙門興泉

（中略）

寂仙房 永興寺 勤勝房 當寺住

（中略）

禅心房 常福寺 慈静房 大興善寺

覺聖房 長康寺 慈日房 寶蓬院

○禅日房 當寺住 静禅房 月輪寺

専良房 般若寺 眞性房 永興寺

（中略）

○當寺第十六長老沙門禅譽

史料⑮のように「光明真言過去帳」には、

如性房の次には寂仙房と眞性房が出てくる。
寂仙房と眞性房は、康暦1（1379）年6月晦
日に86歳で亡くなった*82西大寺第15代長老
興泉と、嘉慶2（1388）5月5日に90歳で死
亡した*83西大寺第16代長老禅譽との間に記
載されている。寂仙房と眞性房は、その間に
死去したのであろう。

史料⑯*84

當寺第十九長老沙門良耀

（中略）

祐光房 永興寺 圓修房 大岡寺

（中略）

○當寺第二十長老沙門高湛

史料⑯のように「光明真言過去帳」には、
寂仙房と眞性房の次に祐光房が出てくる。祐
光房は、応永11（1404）年2月25日に亡くなっ
た*85西大寺第19代長老良耀と、応永15
（1408）年9月25日に86歳で亡くなった*86西
大寺第20代長老高湛との間に記載されてい
る。祐光房は、その間に亡くなったのであろ
う。

史料⑰*87

當寺第廿五長老沙門榮秀

（中略）

圓勝房 吉祥寺 帰一房 永興寺

（中略）

○當寺第廿六長老沙門高海

史料⑰のように、「光明真言過去帳」には祐
光房の次に帰一房が見える。帰一房は、永享
2（1430）年8月2日に77歳で亡くなった*88
西大寺第25代長老榮秀と、永享8（1436）年
4月26日に80歳で亡くなった*89西大寺第26
代長老高海との間に記載されている。帰一房

は、その間に死去したのであろう。

史料⑧*90

當寺第廿八長老沙門元澄

鐘妙房 神願寺 禪春房 円明寺
光乗房 大琳寺 慈光房 金剛光明寺
正印房 永興寺 等空房 當寺住
(中略)

○當寺第廿九長老沙門高筭

永興寺僧として「光明真言過去帳」に最後に見えるのは史料⑧の正印房である。正印房は長禄元(1457)年11月8日に78歳で死去した*91西大寺第28代長老元澄と、文明3(1471)年12月12日に亡くなった*92西大寺第29代長老高筭との間に記載されている。正印房はその間に亡くなったのであろう。このように永興寺は15世紀半ばまでは西大寺末寺であったことは確実である。

ところで、律寺時代の美術遺品として注目されるのは、胎内銘から元亨元(1321)年から元亨2(1322)年にかけて作成された四天王像4体がある*93。それらは像高1m前後のもので、胎内銘により南都興福寺の仏師康俊、康成・俊慶親子によって作成されていることがわかっている。すなわち、金剛宝戒寺の大日如来像を制作した康俊親子が3年後に取り組んだ仏像である。とすれば、永興寺の律寺化はその頃から本格化したのであろうか。大蔵氏は蒙古襲来に際して奮戦したことが知られているので、それを機に叡尊教団との関係ができたのであろうか。おそらく先述の、1338年に亡くなった教性房が初代の長老であったのであろう。

第3節 最勝寺、潮音寺、国分寺、神宮寺

第1項 最勝寺と潮音寺

最勝寺

先述の「明德末寺帳」によれば、佐伯庄最勝寺なる寺院が第3番目に挙がっている。それゆえ、豊後の西大寺直末寺内で第3位の資格を誇る寺院であったと考えられる。しかしながら、美術遺品などが残っておらず、どこに所在したのかすらはっきりしない。ただ、「明德末寺帳」などの注記に「佐伯庄」と記されており、豊後の佐伯庄内に所在したのは確実である。佐伯庄は、現在の佐伯市、南海部郡上浦町・鶴見町・米水津村・蒲江町・直川村・本匠村・弥生町の地域と推定される*94。おそらく、その地域の領主であった、佐伯氏が後援した寺院であろう。

先述した永享8(1436)年の「西大寺坊々寄宿末寺帳」にも「一室」分として出てくるので、その頃までは西大寺の直末寺であった。また、先述の、1453年から1457年にかけて作成された「西大寺末寺帳」(史料②)にも、最勝寺が記されている。

それゆえ、15世紀後半までは西大寺の直末寺であったと考えられる。だが、寛永10(1633)年3月7日付「西大寺末寺帳」など江戸時代の末寺帳には見えない。

ところで、最勝寺僧に関しても、史料⑨のように、「光明真言過去帳」に記載されている。

史料⑨*95

○當寺第廿六長老沙門高海

(中略)

忍敬房 最勝寺 玄春房 當寺住

(中略)

○當寺第廿七長老沙門良誓

すなわち、忍敬房が永享8（1436）年4月26日に80歳で寂した*⁹⁶西大寺第26代長老高海と宝徳2（1450）年1月2日に91歳で亡くなった*⁹⁷西大寺第27代長老良誓との間に出てくる。忍敬房はその間に亡くなったのであろう。とすれば、「光明真言過去帳」からも、15世紀前半までは西大寺末寺であったと考えられる。

潮音寺

先述の「明德末寺帳」によれば、潮音寺なる寺院が第4番目に挙がっている。それゆえ、豊後の西大寺直末寺内で第4位の寺格を誇る寺院であったと考えられる。また、先述の1453年から1457年にかけて作成された「西大寺末寺帳」（史料②）にも、潮音寺が記されている。それゆえ、15世紀後半までは西大寺の直末寺であったと考えられる。しかしながら、どこに所在したのかすらはっきりしない。

ところが、史料③のような注目すべき史料がある。

史料③*⁹⁸

十六代

一、大友房丸豊後前司従五位上源政親親口

潮音寺号法専寺也

（明応）

同五_辰六月十五日_ニ政親長州_ニ卒海蔵寺殿

珠山如意公大禅定門

（中略）

^{（一七八一）}
天明元_辛丑四月十三日改元

大分上野

寶戒寺

史料③は、天明1（1781）年4月13日付の

「清瀧山金剛寶戒寺由来記（仮題）（二）」の一部である。それによれば、大友氏第16代の政親の代に潮音寺が法専寺と名前を変えたことを伝えている。大友政親は明応5（1496）年に死去しており、寺号の変更はそれ以前のことであろう。後述するように、法専寺は神宮寺の東方に位置し、現在は浄土真宗大谷派の寺院であり、寺号の変更は律寺から真宗寺院への転宗、西大寺末寺からの離脱を意味しているであろう。

潮音寺僧についても、史料③のように、「光明真言過去帳」に見える。

史料③*⁹⁹

○當寺第七長老沙門信昭

（中略）

顕真房 潮音寺 如性房 東勝寺

乗道房 三村寺 ○禅了房 招提寺長老

（中略）

○當寺第八長老沙門元耀

史料③によれば、「光明真言過去帳」では潮音寺僧として顕真房が、文和1（1352）年3月2日に86歳で亡くなった*¹⁰⁰西大寺第7代長老信昭と文和4（1355）年10月17日に76歳で寂した*¹⁰¹西大寺第8代長老元耀との間に記載されている。

以上のように、14世紀半ばにおいては、確実に潮音寺は機能していたが、明応頃には寺名も法専寺となり、律寺ではなくなっていた。

第2項 豊後国分寺

叡尊教団の全国的展開史において、奈良西大寺・鎌倉極楽寺が19箇国の国分寺の再興をまかされた事は周知のことである。そのうち、

尾張・加賀・越中・周防・長門・丹後・因幡・讃岐・伊予・伯耆・但馬の11箇国の国分寺は先述の「明德末寺帳」などに記載されているので明らかだ*102が、あと8箇寺は不明とされてきた。

豊後国分寺は先述の「明德末寺帳」などに記載されていない*103。しかしながら、史料②のような注目すべき史料がある。

史料②

仁治改暦春、太守親秀、詣領国國分寺、僧出語故事（中略）親秀聞尊之、興欲戒行於領州之志、故仁治元年夏、遣家臣於西大寺、白其志於叡尊律師、以感大友氏信仏法、即授忍性比丘、（中略）所然、依大友氏請、受天性、誓為再興旧廢精舎、故喜來豊府住国分寺、説戒律化衆民、府主甚悦、以為中興祖、以西大寺為本山、

史料②は、『豊府紀聞卷之一』*104の大友親秀の部分である。それによれば、大友親秀が豊後国分寺を訪ね、その復興、とりわけ律寺としての中興を志し、仁治1（1240）年に家臣を西大寺叡尊の所に遣わした。叡尊は忍性に豊後国分寺の復興を任せた。忍性は喜んで豊後国分寺に来て中興し、西大寺の末寺としたという。

『豊府紀聞』は、元禄期（1688～1704）の地誌であり、仁治1年に忍性による復興がなされたのか否かははっきりしない。しかし、『豊府紀聞』は戸倉貞則という人物が元禄期に古記録や古老の口碑によって編集したもので、西大寺関係者が作成したものではなく、元禄期には国分寺周辺にそうした記録・口伝が存在したのであろう。

ところで、注目されるのは、忍性が宝治2（1248）年に九州へ下向している事実である。

史料③*105

（宝治）
同二年戊申四十八歳

春、為聖教御迎、忍性比丘等下遣鎮西、六月廿二日、定舜隆信房帰朝、即付為迎同法忍性等、先運上律三大部十八具諸經論等、八月四日、入寺、自持三大部二具、十月八日、帰着当寺、記録在別、

史料③は叡尊の自伝である「金剛仏子叡尊感身学正記」の宝治2（1248）年条である。それによれば、宝治2年春において、忍性は隆信房定舜が中国よりも齎した律三大部を取りに九州へ下った。6月22日に定舜は帰朝し、忍性は先に律三大部18セットを先に西大寺に運び、8月4日に西大寺へ帰った。定舜は律三大部2セットを自ら所持して10月8日に帰着した。この史料から、宝治2年の春には忍性が九州にいたことは確実である。それゆえ、大友親秀が仁治1（1240）年に国分寺中興を叡尊に依頼したことを受け、それを任された忍性は律三大部を取りに九州へ下ったのを取りに行くつもりでもあって、宝治2年に豊後国分寺に来ていた可能性はある。

以上のことから、豊後国分寺は大友親秀の願いを受けて忍性によって中興がなされた可能性は高いと考える。

第3項 神宮寺

先述の西大寺末寺帳（史料②）に神宮寺が挙がっている。神宮寺（廢寺）は所在地が不明とされてきたが、近年では大分市勢家の春日神社の神宮寺であったと考えられている*106。

神宮寺は廃仏毀釈によって廃寺となったこともあって、史料が散逸し、神宮寺の歴史を跡づけることは困難である。従来の研究によれば、建久年中に大友能直が衰退していた春日神社を修復し、また、仁治3（1242）年に親秀が修理し、かつ賢如律師をして神宮寺廃寺を興し、祭祀を掌らしめたと考えられている*107。この賢如を奈良最福寺の律僧だった道円房賢如に充てる説もある*108。

しかし、『豊府紀聞』によれば、寛元1（1243）年に叡尊弟子の如賢（賢如ではない）が来たことになっている。如賢は筑前三笠郡の出身で、当初は奈良興福寺の僧となったが、後に叡尊に帰依して弟子となった。寛元1年に豊後府中に来たが、大友親秀に恃まれて、神宮寺を再興したという。すなわち、豊後での律寺の展開は、いわゆる戒律復興活動が軌道に乗り出してまもなく大友氏の後援を受けて始まったことになる。豊後国分寺の例からしても、豊後における叡尊教団の展開は仁治・寛元期というかなり早い時期に始まったことが考えられ注目される。

ところで、神宮寺跡に近在する法専寺には、かつて神宮寺にあって、明治維新の廃仏毀釈に際して移ってきた聖徳太子二歳像（69.3cm）がある。先述のように、法専寺は、潮音寺が改称した寺院であり、そうした背景もあって、神宮寺から法専寺へ聖徳太子二歳像が移されたのかもしれない。それには史料③4のような胎内銘がある。

史料③4*109

西大寺 八月日造主供養
南都 大仏師 法橋康成
貞和三年

それにより南都西大寺大仏師法橋康成によって、貞和3（1347）年に制作されたものであることがわかる*110。

渡辺氏によれば、本像は金剛宝戒寺の大日如来像を親子で造立した康俊の息子康成によって制作されている。南都西大寺大仏師と名乗っており大いに注目される。

また、神宮寺については宮司を勤めた寒田次郎左衛門久次による「天文二十三年三月」の「春日社・神宮寺領」の書き上げがある。それによれば、天文23（1554）年3月において、田3町6段半、畠1町4段の神宮寺領があったことがわかる*111。

ところで、律宗寺院は、交通の要衝に位置し、鎌倉後期から南北朝期に日本各地の関や港湾の管理を行ったことはよく知られている。九州においても、博多大乗寺*112、肥後浄光寺*113、薩摩泰平寺*114、日向志布志豊満寺*115、筑後浄土寺*116、種子島慈音寺*117といった寺院などは、津、港、河川の管理に大きな役割を果たしていた。

たとえば、鎌倉の港和賀江津も極楽寺が管理していた。

史料③5

飯島敷地舛米并嶋築及前濱殺生禁斷等事、如元有御管領、云嶋築興行、云殺生禁斷、可被致嚴密沙汰、殊於禁斷事者、為天下安全、寿算長遠也、任忍性菩薩之例、可有其沙汰候、恐々謹言

(一三四九)

貞和五年二月十一日

尊氏 在判

極楽寺長老

(傍点筆者)

この史料*118は、足利尊氏が、貞和5（1349）

年2月11日付で極楽寺に対して、「飯島敷地升米ならびに鳴築および前浜殺生禁断等事」に関する権利をもとの如く認めたとを示している*119。すなわち、極楽寺は、鎌倉の飯島（和賀江津）の敷地で、着岸した船から関米を取る権利を認められたが、それは飯島の維持・管理（島築）の代償でもあったことがわかる。また、前浜の殺生禁断権も認められていた。しかも、そうした権利は、傍点部からわかるように、忍性以来のことであった。とくに指摘しておきたいのは、この飯島の関米徴収は、現在の光明寺のところ（まさに和賀江津のすぐ近く）にあった末寺万福寺が担当していたらしいことである*120。

こうした律寺の役割を考えると神宮寺浦と呼ばれるほど、目の前に大分湾の入り江が所在した神宮寺が、そうした役割を担っていたことは十分に想定可能であろう。

史料③⑥*121

(天文)
同十^{辛酉}七月廿七日唐船来ル神宮寺着大明國
人二百八十四人

一、同十二^{癸卯}大明國商船五艘来鉄炮渡^ル

史料③⑥は先述した天明1（1781）年4月13日付の「清瀧山金剛寶戒寺由来記（仮題）（二）」の一部である。注目すべきことに、天文10（1541）年7月27日に神宮寺に中国船が到着したとある。これは、中世末の史料であるが、他の律寺の役割を考えれば鎌倉後期・室町期において神宮寺が、神宮寺浦の殺生禁断権を認められ、神宮寺浦の管理を行っていたことは十分に考えられよう。

第2章 豊前国

豊前国の叡尊教団の展開を考えるうえでも先述の「明德末寺帳」は重要である。史料③⑦は、その豊前国の部分である。

史料③⑦*122

豊前国	
<small>規矩</small> 宿坊西室	宝光明寺
大興善寺	<small>宇佐</small> 大樂寺「一室」
<small>「ミヤコ」</small> 宿坊西室	
宝勝寺	
<small>キ</small>	<small>城ミヤコ</small>
<small>城井</small> 宿坊二聖院	観音寺
常福寺	<small>中津河</small>
中願寺	万福寺「三室」
観音寺	

それにより、明德2（1391）年において、大興善寺などの9箇寺が西大寺直末寺であったことがわかる。叡尊教団の展開においても、肥後国と並び、9番目に直末寺の多い国である。その配列順は、寺格を表していると考えられるので、大興善寺がもっとも勢力があった。

史料③⑧*123

豊前国	
大興善寺 ^{<small>規矩部</small>}	寶光明寺
^{<small>紀玖郡</small>}	<small>宇佐</small> 大樂寺
寶勝寺 ^{<small>ミヤコ</small>}	^{<small>ミヤコ</small>} 観音寺城
常福寺 ^{<small>城井</small>}	万福寺 ^{<small>中津河</small>}
中願寺	
観音寺	

史料③⑧は、先述した1453年から1457年にかけて作成された「西大寺末寺帳」の豊前国の部分である。それに挙がっている寺院数と配列も史料③⑦と変わっておらず、14世紀末から15世紀半ばまでは、9箇寺が西大寺直末寺

であったことになる。しかし、後述するように、宝光明寺は早い時期に衰え、大楽寺長老が兼務するほどであった。それゆえ、「明德末寺帳」などを使用する場合、そうした実態との乖離にも注意する必要がある。

また、宝勝寺と観音寺は、「ミヤコ」すなわち、現在の京都郡に所在したと推測される。常福寺は城井（きい）すなわち現在の福岡県築上町城井に所在したと考えられる。中津河万福寺は現在の大分県中津市に所在したと推測される。しかし、それらの寺院は、所在地すら明確ではなく、後考を期したい。以下、大興善寺から配列順に見てみる。

第1節 大興善寺

大興善寺は、鷲峰山の東麓に位置し、現在の福岡県北九州市小倉区企救蒲生に所在する。この一帯は、鎌倉時代以前から紫川中流域を押さえる戦略上枢要の地^{*124}であった。

大興善寺については、『小倉市誌 続編』^{*125}、『北九州市史 古代・中世編』^{*126}、『福岡県の地名』^{*127}、八尋氏^{*128}、中尾多聞氏^{*129}らの研究がある。それらによって、以下のことが明らかにされている。寺の縁起^{*130}によれば、寛元年間（1243～47）に、北条時頼が家臣の佐野源左衛門常世に命じ、叡尊（1201～1290）を開山として開創し奈良西大寺末寺とした寺院で、西大寺末寺の18大寺の一つというほど栄えた。とりわけ、応永年間には大内義弘が、永享6（1435）年には足利義教が寺領を寄付した。しかし、天正年間（1574～92）には、キリシタン大名であった大友氏によって焼き討ちされ、大打撃を受け、衰退したという。慶長1（1596）年には曹洞宗寺院として再興が始まり、現在も曹洞宗寺院である。だが、

文献史料が少ないためにはっきりしない。

大興善寺が、中世において律寺であったことは、先述の「明德末寺帳」に、豊前国の筆頭の西大寺直末寺として記載されていることにより確実である。また、先述の1453年から1457年にかけて作成された「西大寺末寺帳」にも豊前国分として、大興善寺は掲載されている^{*131}。さらに、永享8（1436）年の「西大寺坊々寄宿末寺帳」には「西室分」として大興善寺は挙がっている^{*132}。大興善寺僧は毎年9月に開催される光明真言会に際して西大寺西室に宿泊することになっていた^{*133}ことがわかる。

ところで、律寺時代の大興善寺のことを知るための史料は少ないが、先述の「光明真言過去帳」によれば、大興善寺僧として最初に出てくるのは、如月房である。

史料⑧^{*134}

（前略） ○圓心房 極楽寺長老
覺爾房 桂宮院長老 宗圓房 最福寺
如月房 大興善寺 如心房● 不退寺
○當寺第二長老慈真和尚

史料⑧のように如月房は、正和4（1315）年10月に死去した^{*135}極楽寺第2代長老円真房榮真と、正和5（1316）年1月26日に亡くなった^{*136}西大寺第2代長老慈真との間に記載されている。すなわち、正和4年10月から正和5年1月26日の間に亡くなったと考えられる。

この如月房は、弘安3（1280）年に作成された叡尊の直弟子名簿といえる「授菩薩戒弟子交名」にも「讃岐国人 円心 如月房」^{*137}と見える。如月房は讃岐国出身で諱は円心で

あったのだろう。この如月房円心が第2代の住持であったかどうかははっきりしないが、鎌倉時代の興善寺の住持で、興善寺が鎌倉時代において成立していたことは確実である。

ところで、幸いに興善寺には、如意輪観音像、仁王像、清涼寺式釈迦像が残り当時の興善寺の繁栄ぶりを知ることができる。とりわけ、如意輪観音像には次のような胎内銘がある。

史料(40)*138

(像内背部墨書銘)

敬白 豊前国規矩郡大興善寺講堂本尊
奉造立如意輪観自在菩薩像一軀并伊駄天弁才天
御身中 奉篋置種々目録
御舍利 五宝 五穀 御経等
大願主当寺長老玄海大徳 夫以如意輪観自在菩薩者大悲実軀尊妙也
速□□被於恒時法界万民願望併令成就、誇一天豊饒之樂興□改邪心本朝
令帰善正殆殊護持檀那并自一施乃至多施、一結諸衆現者、榮尽寿樂後者安養都
率往詣可令引導給乃至法界平等利益 現住僧衆交名
賢猷房、了達房、慈性房、道観房、堯空房、尊証房、本願房、順証房、空如房、真行房、識道房、寂忍房、明珠房、圓明房、浄雲房、珠妙房、聖妙房、信珠房、尊法房、教雲房、秀本房、浄口房、禅忍房、光如房、教印房、堯静房、尊覚房、良如房
以上大比丘衆
恵賢房、観性房、教勇房、行順房、思賢房、乗本房、本乗房、泉日房、堯覚房、本思房、

了順房、道順房、恵音房、智空房、道祐房、幸仙房、空寂房、順如房、玄順房、以上沙弥衆
(像内右肩部墨書銘)

□□房 忍証房 修覚房 覚禅房
(像内胸腹部書銘)

物部武直
大檀那駿河権守物部武村 想心房
一族人々

(中略)

大奉行 沙門円成 □印

大仏師法印幸誉法橋幸尊備前公幸為

暦応三年／庚辰／二月八日右筆沙門了恵

すなわち、暦応3(1340)年2月8日付で如意輪観音像は完成し、それに協力した玄海以下の僧名と大旦那物部武村らと、仏師幸誉、幸尊、幸為の名前などがわかる。

仏師については、八尋氏*139によって、幸(康)誉、幸(康)尊は運慶の子康勝の系譜に連なる仏師であることが明らかにされている。また、この如意輪観音像の建立にあたって資金面の援助を行った大檀那の物部(厚東)武村、武直らは、長門を拠点とし、当時は当地を領した厚東氏の一族と考えられている。すなわち、周防灘を通じた交流が分かって興味ぶかい。

さらに、注目されるのは、「以上大比丘衆」「以上沙弥衆」というように、興善寺の47名もの比丘(一人前)と沙弥(半人前)の協力で如意輪観音が完成したことである。すなわち、比丘が28名、沙弥が19名、併せて47名もの僧衆が住する寺院であったことがわかる。

興善寺の開山は叡尊とされるが、如意輪観音像を造立した玄海は興善寺の歴史にお

いて注目されてきた。

史料(41)*¹⁴⁰

曆応元玄海律師住之、大比丘三十八員、其余僧徒沙弥等百有輩、常萃席下、大振開祖之宗綱、化風尤盛、時駿河權守物部武村、物部武直等、為護法檀越、重修造、仏殿講堂寶塔僧房、輪奐之美、視旧猶有加焉、長老海公、戒德密行、為衆被重、牧衆之暇、常座一室、修阿字觀、時感得、山林寂靜砌蛙箝口、自爾以降、至今、寺之結界、群蛙不鳴、又始此処乏清泉、海公一日到寺之南、坐高崖上、修阿字觀、清泉忽自崖下、湧出（今盤水ト云ハ盤水軒有テナリ）海公後、臥雲律師英範律師相次、応永中防州大内義弘喜捨田五十頃、以充僧糧、永享六年三月十六日、尊氏六代將軍義教公、特命閣老秀家、沙弥於企救郡大野庄、賜田八百町、供香燈資、又元龜四年高橋三河守鑑種、命小熊野村古屋治部、同太郎左衛門、莊飾釈迦像、又修葺堂宇、迄天正年中、大友之乱、伽藍焼、僧徒逃散、若干莊田、入官府、慶長初、里民相議、一草堂を結、乃請東雲寺僧玄普禪徳、住之、自此始革禪、（後略）

本史料は「大興善寺縁起」の一部である。それによれば、玄海により大興善寺は大いに栄えたが、玄海は「戒徳密行、為衆被重」と言われるほどで、厳格に戒律を護持し、真言の修法においても大いに優れていた。そのため、阿字觀を修したところ、蛙の鳴き声を黙らせ、以後、静寂を保つことができたし、崖の上で阿字觀を修したところ、崖の下に清水が湧いた。この玄海の跡を臥雲、英範が継いだ*¹⁴¹。

ところで、玄海がいつ亡くなったのかはつ

きりしない。

史料(42)*¹⁴²

○堯仙房 泉涌寺長老 明忍房 称名寺
（中略）
順智房 大興善寺 教道房 長承寺
理教房 無常院 了寂房 神福寺
仙海房 長光寺 ○禪戒房 招提寺長老
○當寺第五長老沙門賢善
廿日（白イ紙ノ上二）

史料(42)は、「光明真言過去帳」の一部で、大興善寺僧として順智房が記載されている。順智房は、建武5（1338）年11月16日に亡くなった*¹⁴³金澤称名寺長老明忍房と、曆応3（1340）年10月2日に90歳で死去した*¹⁴⁴西大寺第5代長老との間に記載されている。順智房は、その間に亡くなったのであろう。死亡時期からみて、この順智房が玄海の可能性がある。

史料(43)*¹⁴⁵

○寂禪房 招提寺長老 念觀房 神宮寺
（中略）
覺禪房 大興善寺 慈律房 浄法寺
（中略）
本如房 称名寺 良仙房 丹波惣持寺

史料(43)のように、大興善寺僧として「光明真言過去帳」に、順智房の次に出てくるのは覺禪房である。覺禪房は曆應4（1341）年6月15日付で亡くなった*¹⁴⁶唐招提寺長老寂禪房と、貞和2（1346）年11月30日に死去した*¹⁴⁷金沢称名寺長老本如房との間に記載されている。その間に亡くなったのであろう。

この史料(43)の覚禅房は、先述の如意輪観音像の暦応3（1340）年2月8日付胎内銘文に見える覚禅房であろう。とすれば、覚禅房とは玄海を継いだ臥雲のことかもしれない。

覚禅房の次に大興善寺僧として「光明真言過去帳」に出てくるのは妙乗房である。

史料(44)*148

○當寺第六長老沙門澄心

（中略）

妙乗房 大興善寺 什聖房 當寺住

（中略）

○當寺第七長老沙門信昭

妙乗房は、貞和3（1347）9月5日に70歳で亡くなった*149西大寺第6代長老沙門澄心と、文和1（1352）年3月2日に86歳で死去した*150西大寺第7代長老沙門信昭との間に書かれている。妙乗房はその間に亡くなったと考えられる。先述の縁起では、臥雲の次には英範が活躍したらしいので、妙乗房が英範かもしれない。

妙乗房の次に大興善寺僧として「光明真言過去帳」に出てくるのは史料(41)のように、道密房である。

史料(45)*151

當寺第七長老沙門信昭

（中略）

本観房 弘正寺 道密房 大興善寺

（中略）

○當寺第八長老沙門元燿

道密房は文和1（1352）3月2日に86歳で亡くなった西大寺第7代長老信昭*152と、

文和4（1355）年10月17日に76歳で寂した*153西大寺第8代長老元燿との間に記載されている。

この道密房は、おそらく大樂寺の初代長老として辣腕を振るった後述する道密房光仙であろう。道密房は、大樂寺から大興善寺へ移動していたことがわかる。

以下、煩雑になるので考証は略するが、正信房*154、宗観房*155、慈静房*156、隆泉房*157、彦春房*158、覺吽房*159と「光明真言過去帳」に出てくる。大興善寺僧として「光明真言過去帳」に最後に見えるのは色吽房である。

史料(46)*160

○恵明房 招提寺長老 祐覺房 般若寺

（中略）

義圓房 浄名寺 色吽房 大興善寺住

○性如房 招提寺長老

○圓空房 室生寺長老

十麟房 大覺寺 舜寥房●常福寺」

○當寺第廿八長老沙門元澄

史料(46)のように、色吽房が享徳3（1452）年12月10日に亡くなった*161招提寺長老恵明房と、長禄元（1457）年11月8日に78歳で寂した*162西大寺第28代長老沙門元澄との間の記載されている。色吽房はその間に亡くなったのであろう。

以上のように、15世紀半ばまでは長老名もわかり、西大寺末寺としての活動が知られる。

ところで、叡尊教団は、鎌倉仏教以前の仏教と異なり、死穢を恐れずに葬送に従事した。その象徴といえるものが五輪塔である。五輪塔は5つの石を積んで、地・水・火・風・空という、この世界の構成要素たる5要素を象

徴する。叡尊教団は、墓所として五輪塔を建立した。その記念碑といえる塔高2メートルを超える巨大五輪塔が全国に遺されている*163。大興善寺にも、その遺物が遺されている。

大興善寺の五輪塔*164は、「よしみねかじゅえん」の前にある。隣には、53センチもある空・風輪の残欠があり、少なくとも2つは大きな五輪塔が所在していたことがわかる。

地輪を欠くも、塔高が176センチもあり、おそらく2メートルを超える花崗岩製の巨大五輪塔であった。空輪高37センチ、幅40センチ、風輪高24センチ、幅46センチ、火輪高51センチ、幅76センチ、水輪高64センチ、幅79.8センチである。

また、山門と舍利殿の修理に際して、山門の礎石や舍利殿の縁束石に五輪塔の一部が転用されていた*165。すなわち、ほかにも五輪塔の存在が知られる。



図 大興善寺五輪塔(地輪欠)

第2節 大楽寺

大楽寺は大分県宇佐市南宇佐に所在し宇佐八幡宮の神宮寺として知られる。現在は古義真言宗高野山末である。この大楽寺は元弘3(1333)年12月頃に成立し、建武元(1334)年4月15日附で後醍醐天皇の勅願寺となった寺院である。開基は宇佐公連、開山は道密上人で諱は光仙という*166。しかし、大楽寺には平安仏の弥勒仏などが伝来する。また、『太宰管内志』によれば、大楽寺は駅館川の河口の江島村に所在し、「大楽寺跡」という字名が残るといふ。それゆえ、移転を契機に叡尊教団の寺院化したと考えられる*167。

大楽寺については、『宇佐市史』*168、『宇佐宮大楽寺』といった研究がある。とりわけ、『宇佐宮大楽寺』は大楽寺研究の到達点といえる。大楽寺は、「明德末寺帳」では第4番目に記載され、豊前国の西大寺直末寺で第4位の寺格の寺院であったと推測される。また、「明德末寺帳」には「一室」と注記されているように、奈良西大寺で毎年9月開催の光明真言会に際しては、西大寺一室に宿泊することになっていた。そのことは、永享8(1436)年の「西大寺坊々寄宿末寺帳」に「一室」分として大楽寺が記載されている*169ことからわかる。

さらに、寛永10(1633)年3月7日附の「西大寺末寺帳」にも見える*170ので、その頃までは西大寺末寺であった。しかし、寛政3(1791)年11月の『寺院本末帳』では真言宗寺院の「無本寺」(独立寺院)として大楽寺は挙がっている*171。それゆえ、18世紀末には独立寺院であった。

さて、開山の道密房については、これまでいつ死亡したのか明らかではなかったが、死

亡年もほぼ推定できる。道密房宛の文書で年月日がわかるのは観応2（1351）年6月日附「足利直冬禁制」*172である。足利直冬は、大楽寺への乱暴狼藉を禁止する禁制を、住持の道密房に与えている。それゆえ、観応2年6月まで道密房は活躍していた。

また、先述の史料(42)のように、道密房は、「光明真言過去帳」において、文和1（1352）3月2日に86歳で死亡した*173西大寺第7代長老信昭と、文和4（1355）年10月17日に76歳で死亡した*174西大寺第8代長老元耀との間に記載されている。それゆえ、道密房は文和1年3月2日から文和4年10月17日までの間に亡くなったのであろう。

さらに注目されるのは、道密房の所属寺院が大興善寺となっていた点である。道密は大興善寺僧として亡くなったと考えられる。大興善寺は豊前国の筆頭寺院であったので、亡くなった時期には大楽寺長老から大興善寺長老へと出世していたのである。道密房の大楽寺長老時代には、寺領102町を超える寺院として栄え、後述のように宝光明寺、蓮福寺といった後醍醐天皇祈願所寺院の住職を兼ねるほどであった。しかし、南北朝動乱などにより、寺領が侵害されて衰退していった。

ところで、大楽寺の住持も2名が「光明真言過去帳」に出てくる。大楽寺僧として最初に「光明真言過去帳」に出てくるのは教悟房である。

史料(47)*175

覺日房 金剛寺 俊一房 桂宮院
(中略)
教悟房 大楽寺 春義房 観音寺
(中略)

○當寺第十五長老沙門興泉

教悟房は、応安3（1370）年8月15日に亡くなった*176桂宮院長老俊一房と、康暦1（1379）年6月晦日に86歳で死亡した*177西大寺第15代長老興泉との間に記載されている。それゆえ、その間に亡くなったのであろう。

永和1（1375）年10月日附で、大楽寺住持空鏡が、寺領保全の訴えを室町幕府に訴えているが、時期を考えれば、空鏡はこの教悟房かもしれない。

史料(48)*178

當寺第十九長老沙門良耀
(中略)

了密房 大楽寺 宗樹房 現光寺
本做房●良福寺

○當寺第二十長老沙門高湛

史料(48)のように、「光明真言過去帳」に、教悟房の次に出てくるのは了密房である。了密房は、応永11（1404）年2月25日に亡くなった*179西大寺第19代長老沙門良耀と、応永15（1408）年9月25日に86歳で死亡した*180西大寺第20代長老沙門高湛との間に記載されている。了密房は、その間に亡くなったのだろう。大楽寺には永徳2（1382）年の銘を有する梵鐘があるが、この了密房が住持の時代に制作されたのであろう。

大楽寺住持は、了密房の後は「光明真言過去帳」に見えない。その後は衰退が顕著になったのかもしれない。

第3節 宝光明寺

宝光明寺に関しては、美術遺品などを初め、

ほとんど遺物が残っていないためにはっきりしないが、『柳ヶ浦町史』の研究がある*181。しかし、寶光明寺が西大寺末寺であったことなどは明らかにされていない。そこで、叡尊教団史の観点から見直そう。

寶光明寺は、「明德末寺帳」(史料37)と先述の1453年から1457年にかけて作成された「西大寺末寺帳」(史料38)には2番目に記載されており、豊前国の西大寺直末寺として第2位の寺格であったと考えられる。

しかし、そうした高い寺格の寺院であったはずなのに、「光明真言過去帳」に一人も名が出てこない。それゆえ、不思議に思っていたが、『宇佐宮大楽寺』*182によって「大楽寺文書」中に宝光明院関係の文書があることがわかり、その謎が解けた。すなわち、宝光明寺は早い時期に勢力を失い、大楽寺の住持が兼務する寺院となっていた。だが、西大寺側は成立期の寺格を固定化していたようで、そのままの記載が踏襲されたということであろう。この点は「明德末寺帳」などの分析に際して注意すべきことといえる。

さて、「大楽寺文書」中の宝光明寺関連史料によって、中世の宝光明寺の実態を明らかにできる。まず、注目されるのは地理的位置であるが、宇佐市金屋地区に所在したと考えられている。とりわけ、「金屋村絵図写」(文化会館旧蔵)によれば、周防灘に注ぐ駅館川の河口近くに宝光明寺が位置していた*183ことがわかる。先述したように、叡尊教団の寺院は津や浜、海・河川の管理に関わっていたと考えられ、駅館川との関係が推測されるが、後述のように、それは実証できる。

次に注目されるのは、宝光明寺が後醍醐天皇の御祈願所であった点である。

史料(49)*184

豊前国宝光明寺、為御祈願所寺領、不可有相違者、天氣如此、仍執達如件」

建武元年四月廿一日 右少弁
道密上人御房

史料(49)は、建武1(1333)年4月21日付の「後醍醐天皇綸旨」である。それによれば、宝光明寺は後醍醐天皇の御祈願寺であったことがわかる。また、宛名が大楽寺長老の道密房であり、大楽寺長老が宝光明寺長老を兼ねるようになっていたと考えられる。

史料(50)*185

豊前国宝光明寺門前河流、自荒馬瀬、至車瀬、可禁断殺生者、天氣如此、仍執達如件」

建武元年五月九日右少弁藤長
道密上人御房

史料(51)*186

豊前国寶光明寺門前河流、自荒馬瀬、至于車瀬、禁断殺生事、今年三月三十日、御教書加一見候、恐々謹言

六月十二日 筑後守頼尚(花押)
謹上 寶光明寺長老 侍者

史料(51)は、建武1(1333)年5月9日付の「後醍醐天皇綸旨」である。それによれば、宝光明寺は、門前の駅館川の荒馬瀬から車瀬までの殺生禁断を認められている。すなわち、宝光明寺は門前の駅館川の荒馬瀬から車瀬まで*187の殺生禁断権を授与されていた。金屋の地は宇佐宮の鍛冶の集落があった地とされ、寶光明寺のあたりは、駅館川河口の中でもっとも浅く、渡河するのにもっとも便利な地で

あったという*188。

鎌倉極楽寺は、忍性以来、飯島の港の管理権を有し、その利用料の徴収を行っていた。また、前浜（由比ヶ浜・材木座海岸）の殺生禁断権を有し、それを梶子にした浦人（漁師）支配を認められていたと考えられている。とすれば、宝光明寺も、そうした殺生禁断権を梶子に駅館川川の管理や川の民（漁師）の支配権を握っていたと考えられる。

史料⑤は、年未詳「豊前国守護少貳頼尚書状」である。欠年のために、年附を明確にできないのが残念である。それから、そうした権利は、後の守護少貳頼尚によっても認められていることがわかる。

史料⑥*189

殺生禁断之事

右、江島別符成願寺之門前之河流、自荒馬瀬、至于車瀬、任先例、弥令禁制、奉貢尊神威光、殊可備朝家静謐之巨益者也、若於違犯之輩者、可処罪科社例之状、所仰如件

文明元年八月一日

大宮司宇佐宿弥（花押）

史料⑥は文明1（1469）年8月1日附の大宮司到津公弘の禁制である。この史料により、宝光明寺が所有していた荒馬瀬から車瀬までの殺生禁断権が、大楽寺末寺と推測される江島別符の成願寺に移管されていることがわかる。江島別符は宝光明寺の対岸であり、おそらく、その頃には、宝光明寺は廃寺となっていたのであろう。

なお、大楽寺が所有する「宇佐大楽寺文書」によって、成願寺、蓮福寺という大楽寺末寺を知ることができる。とりわけ、蓮福寺は後

醍醐天皇の祈願所であり、大いに注目されるが、史料がないためにこれ以上論じることができない。後考を期したい。

おわりに

以上、豊後国・豊前国の西大寺直末寺について主に論じてみた。

豊後国については、金剛宝戒寺、永興寺、神宮寺について明らかにした。他方、豊前国に関しては、従来研究されてきた大興善寺、大楽寺に加えて宝光明寺について明らかにできた。

「豊前・豊後国西大寺末寺図」を見れば明らかのように、豊後・豊前両国における叡尊教団の展開は、日田永興寺を別とすれば周防灘・大分湾といった海沿いの地に末寺が展開したことがわかる。金剛宝戒寺・大楽寺といった寺院のように、まず海岸・河口部から始まり、のちに、内陸部へ移転した寺院もあるが、最初は海沿いの地に末寺が展開していったことは確実であろう。すなわち、叡尊教団の交通の要衝への展開が豊後・豊前においても明確に見られるのである。

とりわけ、宝光明寺の事例で具体的に明らかにしたように、殺生禁断権を梶子に駅館川を管理し、漁民把握を行っていたと考えられる。この点は、鎌倉極楽寺による殺生禁断権を梶子とする前浜支配権が指摘されているが、豊前においてもそうであったことがわかり大いに興味ぶかい。おそらく、豊後神宮寺も、ザビエルが上陸した神宮寺浦の殺生禁断権を梶子に大分湾の浦支配を行っていたと推測される。

次に注目されるのは、豊後国分寺・神宮寺、豊前大興善寺の分析で明らかにしたように、

- (1)) 46・47頁。
- *13 拙著『中世律宗と死の文化』〈前註(1)〉191頁など参照。
 - *14 「律苑僧宝伝」『大日本仏教全書105』(名著普及会、1979) 149・150頁。
 - *15 「律苑僧宝伝」〈前註(14)〉149・150頁。
 - *16 拙稿「西大寺叡尊像に納入された「授菩薩戒弟子交名」と「近住男女交名」」(拙著『日本中世の禪と律』吉川弘文館、2003) 71頁。
 - *17 「西大勅諭興正菩薩行実年譜」は奈良文化財研究所編『西大寺叡尊伝記集成』(法蔵館、1977) 所収に依拠している。
 - *18 「西大勅諭興正菩薩行実年譜」(『西大寺叡尊伝記集成』〈前註(17)〉) 140頁。
 - *19 「西大勅諭興正菩薩行実年譜」(『西大寺叡尊伝記集成』〈前註(17)〉) 141頁。
 - *20 「西大勅諭興正菩薩行実年譜」(『西大寺叡尊伝記集成』〈前註(17)〉) 152頁。
 - *21 「西大勅諭興正菩薩行実年譜」(『西大寺叡尊伝記集成』〈前註(17)〉) 153頁。
 - *22 「学正記」は、『西大寺叡尊伝記集成』〈前註(17)〉所収本によった。
 - *23 「学正記」『西大寺叡尊伝記集成』〈前註(17)〉50頁。
 - *24 「西大寺西僧坊造営同心合力奉加帳」(『西大寺叡尊伝記集成』〈前註(17)〉) 385頁。
 - *25 「異国襲来祈祷注録」(『西大寺叡尊伝記集成』〈前註(17)〉) 403頁。
 - *26 「招提千歳伝記」(『大日本仏教全書105』名著普及会、1979) 85頁。
 - *27 拙著『新版 鎌倉新仏教の成立』(吉川弘文館、1998) 209頁
 - *28 「西大勅諭興正菩薩行実年譜」(『西大寺叡尊伝記集成』〈前註(17)〉) 197頁。
 - *29 八尋「九州西大寺末寺の美術遺品」〈前註(1)〉46頁。
 - *30 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」(速水侑編『日本社会における仏と神』吉川弘文館、2006) 参照。
 - *31 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉81頁。
 - *32 「招提千歳伝記」〈前註(26)〉24頁。
 - *33 内田啓一「和泉市久保惣記念美術館蔵胎蔵旧図様について—西大寺性瑜の事績」(『仏教芸術』286、2006) 62頁。
 - *34 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉88頁。
 - *35 「常楽記」『群書類従29』建武元(1334)年11月21日条。
 - *36 「常楽記」〈前註(35)〉暦応元(1338)年7月27日条。
 - *37 拙稿「西大寺叡尊像に納入された「授菩薩戒弟子交名」と「近住男女交名」」〈前註(16)〉97頁。
 - *38 「西大寺西僧坊造営同心合力奉加帳」(『西大寺叡尊伝記集成』〈前註(17)〉) 384頁。
 - *39 『大分県金剛宝戒寺大日如来像修理記録写真 平成七年』1995、6頁。
 - *40 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉91頁。
 - *41 「西大寺代々長老名」(『西大寺関係史料(一) 諸縁起・衆首交名・末寺帳』、奈良国立文化財研究所、1968) 73頁。
 - *42 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *43 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉94頁。
 - *44 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *45 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *46 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉95頁。
 - *47 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *48 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *49 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉96頁。
 - *50 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *51 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *52 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分

- 析」〈前註(30)〉98頁。
- *53 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *54 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *55 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉99頁。
 - *56 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *57 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *58 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉100頁。
 - *59 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *60 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *61 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉108頁。
 - *62 「招提千歳伝記」〈前註(26)〉87頁。
 - *63 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉74頁。
 - *64 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉116頁。
 - *65 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉74頁。
 - *66 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉74頁。
 - *67 「清瀧山金剛寶戒寺由来記(一)」〈前註(41)〉56頁。
 - *68 「清瀧山金剛寶戒寺由来記(一)」〈前註(41)〉56頁。
 - *69 『大分県の地名』(平凡社、1995) 967・968頁。
 - *70 八尋「九州西大寺末寺の美術遺品」〈前註(1)〉参照。『大分県史美術篇』(大分県、1981) 229・230頁。
 - *71 拙稿「西大寺末寺帳考」(拙著『勸進と破戒の中世史』)〈前註(2)〉159頁。
 - *72 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉89頁。
 - *73 「常楽記」曆応元(1338)年7月27日条〈前註(35)〉216頁。
 - *74 『金沢文庫古文書』12-3、20頁。
 - *75 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉90頁。
 - *76 「招提千歳伝記」〈前註(26)〉87頁。
 - *77 『金沢文庫古文書12輯 識語編三』(金沢文庫、1958) 20頁。
 - *78 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉91頁。
 - *79 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *80 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *81 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉97・98頁。
 - *82 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *83 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *84 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉102頁。
 - *85 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *86 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *87 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉106頁。
 - *88 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *89 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *90 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉108頁。
 - *91 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉74頁。
 - *92 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉74頁。
 - *93 八尋「九州西大寺末寺の美術遺品」〈前註(1)〉。『大分県史美術篇』〈前註(70)〉229・230頁参照。
 - *94 『日本歴史地名大辞典 大分県』(角川書店)の「佐伯市」参照。
 - *95 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉106頁。
 - *96 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *97 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *98 「清瀧山金剛寶戒寺由来記(仮題)(二)」〈前註(41)〉59頁。
 - *99 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉93頁。
 - *100 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *101 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - *102 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前註(1)〉27頁など参照。
 - *103 追塩千尋『国分寺の中世的展開』(吉川弘

- 文館、1996) 238頁において、武蔵・豊後・陸奥各国分寺が西大寺末であった可能性を指摘されているが、「年代が確定できず、史料的にも問題がある」として、それ以上取り上げていない。
- *104 『豊州雑誌』(大分県立図書館所蔵)所収『豊府紀聞巻之一』によった。『豊府紀聞』は、戸倉貞則という人物が元禄期に古記録や古老の口碑によって編集したものという(『豊府紀聞(市場直次郎、十時英司氏編集)』解説、平成20年の日名子健二氏によるワープロ版による)。
- *105 『学正記』『西大寺叡尊伝記集成』〈前註(17)〉21頁。この律三大部将来のことに関しては細川涼一校注『感身学正記1』(平凡社、1999)181頁参照。
- *106 渡辺文雄「大分法専寺・康成在銘南無仏太子像をめぐる」『大分県立歴史博物館研究紀要』4、2003。
- *107 佐藤蔵太郎『豊後史蹟考』(歴史図書社、1976)149頁。佐藤氏は「豊府紀聞」などによって仁治3年の賢如律師による中興を指摘する。『雉城雑誌』(『大分県郷土史料集成 地誌編』臨川書店、1973)によれば仁治3年の賢如律師による中興を指摘しており、佐藤氏は『雉城雑誌』によったのであろう。
- *108 渡辺「大分法専寺・康成在銘南無仏太子像をめぐる」〈前註(106)〉81頁。
- *109 渡辺「大分法専寺・康成在銘南無仏太子像をめぐる」〈前註(106)〉84頁。
- *110 渡辺「大分法専寺・康成在銘南無仏太子像をめぐる」〈前註(106)〉83頁。
- *111 『大分県史料(9)第2部』(大分県史刊行会、1956)389頁所収「春日神領坪附」。大分県立先哲資料館寄託の「寒田家文書」によって史料対校を行った。
- *112 拙著『中世律宗と死の文化』〈前註(1)〉参照。
- *113 小川弘和「地域社会・東アジアのなかの浄光寺」(『玉名市文化財報告書第28集 中世真言律宗系寺院浄光寺跡 南大門遺跡』2013)。
- *114 「中世叡尊教団の薩摩国・日向国・大隅国への展開—薩摩国泰平寺・日向国宝満寺・大隅正国寺に注目して—」〈前註(1)〉参照。
- *115 「中世叡尊教団の薩摩国・日向国・大隅国への展開—薩摩国泰平寺・日向国宝満寺・大隅正国寺に注目して—」〈前註(1)〉参照。
- *116 拙稿「中世叡尊教団と泉涌寺末寺の筑後国への展開—新発見の中世西大寺末寺帳に触れつつ」〈前註(1)〉参照。
- *117 拙著『中世律宗と死の文化』〈前註(1)〉参照。
- *118 極楽律寺編『極楽律寺史 中世・近世編』極楽律寺、2003、146頁。
- *119 この点は、石井進「都市鎌倉における『地獄』の風景」(『御家人制の研究』、吉川弘文館、1981)91頁参照。
- *120 拙著『中世都市鎌倉の風景』(吉川弘文館、1993)。
- *121 「清瀧山金剛寶戒寺由来記(仮題)(二)」〈前註(41)〉。
- *122 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前註(1)〉150・151頁。
- *123 拙稿「中世叡尊教団と泉涌寺末寺の筑後国への展開—新発見の中世西大寺末寺帳に触れつつ」〈前註(1)〉79頁。
- *124 松本洋一『新企救風土記』(若園印刷商会、2007)34頁。
- *125 『小倉市誌 続編』(福岡県小倉市、1940)。
- *126 『北九州市史 古代・中世編』(北九州市、1992)。
- *127 『福岡県の地名』(平凡社、2004)。
- *128 八尋「九州西大寺末寺の美術遺品」〈前註(1)〉、「筑前飯盛神社神宮寺文殊堂文殊菩薩

- 薩騎獅像および豊前大興善寺如意輪観音像について」(『九州歴史資料館研究論集 2』1976)。
- * 129 中尾多聞『鷲峰山大興善寺の歴史』(私家版、1994)、『北九州市指定有形文化財(建造物)大興善寺山門、舍利殿保存修理工事報告書』(宗教法人大興善寺、2002)。
 - * 130 「鷲峰山縁起」は、享保12(1727)年に小倉の養徳院の住職であった契黙巖が、先住の愚禪や大興善寺中興一世快堂宗逸(貞享元(1684)年大興善寺住職に就く)らの聞き取りを元に記したという(『北九州市指定有形文化財(建造物)大興善寺山門、舍利殿保存修理工事報告書』〈前註(129)〉53頁)。中尾多聞『鷲峰山大興善寺の歴史』〈前註(129)〉参照。
 - * 131 拙稿「中世叡尊教団と泉涌寺末寺の筑後国への展開—新発見の中世西大寺末寺帳に触れつつ」〈前註(1)〉79頁。
 - * 132 拙稿「西大寺末寺帳考」(拙著『勸進と破戒の中世史』)〈前註(2)〉155頁。
 - * 133 拙稿「西大寺末寺帳考」(拙著『勸進と破戒の中世史』)〈前註(2)〉161頁
 - * 134 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉86頁。
 - * 135 田中敏子「極楽寺二代長老に就て」(『鎌倉』5、1960)。
 - * 136 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - * 137 拙稿「西大寺叡尊像に納入された「授菩薩戒弟子交名」と「近住男女交名」」〈前註(16)〉75頁。
 - * 138 平田寛『九州美術史年表(古代・中世篇)』(九州大学出版、2001)342・343頁による。この胎内銘は、すでに『小倉市誌』〈前註(125)〉と八尋「筑前飯盛神社神宮寺文殊堂文殊菩薩騎獅像および豊前大興善寺如意輪観音像について」〈前註(128)〉、久野建『造像銘記集成』(東京堂出版、1985)405・406頁と平田寛『九州美術史年表』の4度翻刻されている。八尋論文は墨書銘などの位置などが書かれ重要であるが、『小倉市誌』の翻刻と比較すると僧名が41名に過ぎず、54名の『小倉市誌』と大いに異なっている。また、最も新しい平田『九州美術史年表』も『小倉市誌』より沙弥が3名少ないなどの相違がある。それゆえ、現物の再調査の必要がある。
 - * 139 八尋「九州西大寺末寺の美術遺品」〈前註(1)〉、「筑前飯盛神社神宮寺文殊堂文殊菩薩騎獅像および豊前大興善寺如意輪観音像について」〈前註(128)〉。
 - * 140 『小倉市誌 続篇』〈前註(125)〉689頁。
 - * 141 中尾多聞『鷲峰山大興善寺の歴史』〈前註(129)〉45頁。
 - * 142 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉90頁。
 - * 143 『金沢文庫古文書』12-3 〈前註(77)〉、20頁。
 - * 144 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - * 145 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉90頁。
 - * 146 「招提千歳伝記」〈前註(26)〉28頁。
 - * 147 『金沢文庫古文書』12-3 〈前註(77)〉、32頁。
 - * 148 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉92頁。
 - * 149 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - * 150 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - * 151 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉92頁。
 - * 152 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - * 153 「西大寺代々長老名」〈前註(41)〉73頁。
 - * 154 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉94頁。
 - * 155 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉95頁。
 - * 156 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註(30)〉98頁。

- * 157 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註 (30)〉101頁。
- * 158 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註 (30)〉104頁。
- * 159 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註 (30)〉108頁。
- * 160 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註 (30)〉108頁。
- * 161 「招提千歳伝記」〈前註 (26)〉87頁。
- * 162 「西大寺代々長老名」〈前註 (41)〉74頁。
- * 163 拙著『中世律宗と死の文化』〈前註 (1)〉参照。
- * 164 小川秀樹「豊前大興善寺の大形五輪塔」(『地域相研究』18、1989)。
- * 165 『北九州市指定有形文化財(建造物)大興善寺山門、舍利殿保存修理工事報告書』〈前註 (129)〉。
- * 166 『宇佐宮大楽寺』(宗教法人大楽寺、1987)。
- * 167 『宇佐宮大楽寺』〈前註 (166)〉145頁など参照。
- * 168 『宇佐市史 中巻』(大分県宇佐市史刊行会、1977)、『宇佐宮大楽寺』〈前註 (166)〉。
- * 169 拙稿「西大寺末寺帳考」(拙著『勸進と破戒の中世史』)〈前註 (2)〉155頁。
- * 170 「西大寺末寺帳 その三」〈前註 (6)〉119頁。
- * 171 『宇佐宮大楽寺』〈前註 (166)〉13頁。
- * 172 「宇佐大楽寺文書」『大分県史料 (9) 第2部』〈前註 (111)〉277頁。
- * 173 「西大寺代々長老名」〈前註 (41)〉73頁。
- * 174 「西大寺代々長老名」〈前註 (41)〉73頁。
- * 175 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註 (30)〉96頁。
- * 176 「常楽記」(群書類従29) 227頁。
- * 177 「西大寺代々長老名」〈前註 (41)〉73頁。
- * 178 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註 (30)〉102頁。
- * 179 「西大寺代々長老名」〈前註 (41)〉73頁。
- * 180 「西大寺代々長老名」〈前註 (41)〉73頁。
- * 181 『柳ヶ浦町史』(柳ヶ浦町史刊行会、1970)。
- * 182 『宇佐宮大楽寺』〈前註 (166)〉。
- * 183 『宇佐宮大楽寺』〈前註 (166)〉79・80頁。
- * 184 瀬野精一郎編『南北朝遺文 九州編第一巻』(東京堂出版、1980) 11頁。
- * 185 瀬野精一郎編『南北朝遺文 九州編第一巻』〈前註 (184)〉14頁。
- * 186 瀬野精一郎編『南北朝遺文 九州編第六巻』(東京堂出版、1990) 221頁。
- * 187 荒馬瀬から車瀬までを、『宇佐宮大楽寺』〈前註 (166)〉79・80頁では、現在の駅館川の小松橋から川部橋の間に比定している。河道は変動しており、現況を中世まで遡及するのは困難であるが、ひとまずの目安としたい。
- * 188 『柳ヶ浦町史』〈前註 (181)〉151頁。
- * 189 「宇佐大楽寺文書」『大分県史料 (9) 第2部』〈前註 (111)〉278頁。